

いたや は ざん

板谷波山

日本陶芸界の巨匠 筑西市



(出光美術館提供)

明治5年(1872) - 昭和38年(1963)。真壁郡下館町〔筑西市〕生まれ。本名は嘉七。小学校卒業後、東京に出て軍人を目指す。陸軍士官学校の体格検査で軍人には不適とわかり中学を退学、絵画塾に入って絵を習う。明治22年(1889)東京美術学校彫刻科〔東京芸術大学〕入学。同29年(1896)に石川県立工業学校で教鞭をとりながら、焼きものの研究を行う。独立後、苦勞を重ねるが、大正3年(1914)の東京大正博覧会の出品作品が宮内省〔宮内庁〕に買い上げられたことで、名声を得る。昭和4年(1929)に帝国美術院会員、同9年(1934)には帝室技芸員となり、同28年(1953)、陶芸家として初の文化勲章を受賞、翌年には茨城県名誉県民に選ばれる。

板谷波山は、真壁郡下館町〔筑西市〕の商家であった板谷家の三男として生まれました。母のしつけはたいへんきびしく、「人のいやがる仕事は、家のものがやりなさい。便所の掃除はおまえがしなさい。」と言われ、毎日掃除をし、冬でも冷たい水を使ってぞうきんがけをしました。そのため、波山は小さいときから、どんなに苦しいことにも負けない強い心を持つことができました。

小さいころから軍人にあこがれていた波山は、小学校卒業後、東京に出て軍人を目指しました。しかし、陸軍士官学校の体格検査に不合格となり、軍人になることはあきらめました。

(軍人になってお国のために尽くすことができないならば、自分のできることで尽くそう。)

そこで、小さいころから得意だった絵を描くために絵画塾に入り、その後もっと専門の勉強をするため、東京美術学校〔東京芸術大学〕の彫刻科に入りました。そのころの校長は、岡倉天心(P.7参照)でした。天心は波山に「日本に昔からある美術は、世界の模範である。美術は、独創的なものでなければならぬ。」と熱く語りました。波山の心は美術に対する期待でふくらみ、美術に生きがいを感じていきました。

美術学校卒業後、先輩にさそわれて、石川県立工業学校の教師となった波山は、そこで焼きものの研究に打ち込みました。名の知れた焼きものの産地に出かけては、本場の焼きものを自分の手でたしかめ、新しい釉薬や技術を考え出しました。

(自分の窯で焼きものがしたい。粘土をこね、ろ



明治以降の陶磁器として初の重要文化財に指定された「葆光彩磁珍果文花瓶」

(泉屋博古館分館蔵)

くろをひき、窯焼きを自分の手でしたい。)

波山は独立を考え、勤めていた工業学校を辞めて東京に戻りました。しかし、東京に戻っても住む家がなく、生活は貧しさのどん底でした。着物はお金に変わり、米もみそもなくなってしまうと、うどん粉をまるめたものを煮て食べました。一日に一食しか食べられない日も続きました。そんな波山に対して、周囲の人は、家族のことも考えるようにと忠告しましたが、「どんなことがあっても、この決心は変えない。」と東京の田端〔東京都北区田端〕に夫婦で少しずつ窯を作り上げていきました。

できあがった窯はとても大きく、薪もたくさん必要でした。途中で薪が足りなくなると、家の雨戸や板など薪になるものは何でも燃やしました。そうしてできた作品は、とてもすばらしいものができ、ついに内国勸業博覧会で入賞し、その後、全国窯業大会では1等賞を取りました。大正3年(1914)に東京大正博覧会に出品した「彩磁花瓶」は、宮内省〔宮内庁〕が買い上げるほどみごとな作品でした。

波山には、陶芸の先生がいたわけではありません。焼きものの産地をたずねて、自分一人の力で研究し、苦勞を重ねながら制作に打ち込んだ努力の人でした。また、少しでもきずなどの欠点があるとたたき割ってしまうほど作品に対してとてもきびしい態度を買いました。

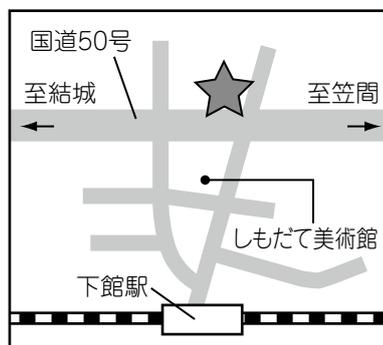
波山は、制作の合間によく郷里を訪れ、高齢者には自作の「鳩杖」を贈って、長寿を祝い、戦没者の遺族には自作の「香炉」や「観音像」を贈り、霊を慰めました。まさに陶芸一筋の一生でした。

ゆがりのスポットに行ってみよう

板谷波山記念館

所在地 筑西市田町甲866-1

内容 生家のほか、東京田端にあった窯などの工房をそっくり移築し、当時の姿で再現しています。



おもな 参考文献

『板谷波山傳』(茨城県・1967)

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)